

大川遺跡第1次調査出土の縄文時代早期の剥片石器

吉村 駿吾

はじめに

大川遺跡第1次調査は1957年11月9日～14日に酒詰仲男・岡田茂弘両氏によって行われ、その資料は同志社大学歴史資料館に保管されている。本調査において出土した資料は1958年に報告書にまとめられている。しかし、報告書に掲載されている遺物はごく一部であり、剥片石器だけでも千点以上に及ぶ。

本稿はその内、出土層位が判明し、縄文時代早期（大川式～神宮寺式主体）の土器に伴うと考えられる剥片石器について資料紹介をおこない、縄文時代早期における石器研究にささやかながら寄与しようとするものである。

1、遺跡の概要

報告書の記載に従って遺跡の概要を述べておきたい。大川遺跡は奈良県山辺郡山添村中峯山字大川に属し、木津川の支流名張川の西岸、河岸段丘上に位置する。この河岸段丘は長さ約220m、幅100m、標高約150m前後の上位面と、その周辺に付属する幅約20m、その落差2mの下位面に区分され、遺物の散布は段丘崖周縁の約20mの帯状地域において濃厚であった。トレンチは最も濃厚に遺物が散布する奥谷勇治氏所有の畑地に地形傾斜とほぼ直角に全長16.5m、幅1.5mのAトレンチが設けられた。更にその延長上、約6mの地点からAトレンチと同一方向に全長20m、幅1.5mのBトレンチが設けられ、下位面にもほぼ同一方向に全長6m、幅1.5mのCトレンチが設けられた。またAトレンチは後に主軸と直角に全長7m、幅1.5mのクロストレンチが設けられた。

遺物包含層は1、2、3、4層であり5層以下は無遺物層である。1層は耕作による攪乱層（暗褐色砂質土層）、3層（褐色砂質土層）は主に縄文時代後期の土器を包含する。またAトレンチ南端で3層を切る2層（軟質の黒褐色砂質土層）が認められた。4層（黒褐色砂質土層）は主に縄文時代早期の土器を包含し、Aトレンチ1区を中心とする地区に礫群が認められる。また3層出土遺物はBトレンチ北端付近、4層出土遺物はAトレンチ北半地区に分布の中心がある。

2、資料の状態

まず、大川遺跡第1次調査出土資料について断っておかなければならないのは、出土層位が不明な資料が多量に存在することである。また、報告書に掲載されている石鏃や尖頭器の多く、調査日誌は見つからなかった。

剥片石器はコンテナに小箱に分けて収納され、小箱ひと箱に数個から数十個が入っていた。その中には、カードがいれられており出土地区、出土レベル、日付が記されていた。しかし、それらのカードは一箱に違う内容のものが数枚入っていたり、石器自体の注記とも異なっていることが多か

った。そのため基本的に信用できる情報は石器の注記のみと考えられる。ただし注記がなされていない資料が少なからずあり、特にチップといった非常に小型のものに多い。

また、出土層位は発掘時に層位的にとりあげを行っていないためか、注記にはレベルのみを記している。そのため、地区ごとに層位断面図と対応させる必要があり、地区割り、層位断面図が図示されているAトレンチ北半地区（Aトレンチ1区、1-区、1+区、1'区、2'区、3'区）ⁱしか出土層位が判明しない。そこでAトレンチ北半地区4層出土の剥片石器のみを紹介する。当地区は、4層出土遺物の分布の中心であるとされている。

3、注記と出土層位との対応関係について

前述したように、注記は石器に墨で出土地区（TA1、TA1'など）、レベルが記されている。そしてレベルは多くが「0-20」、「20-40」といったように20cmごとに記されている。また中には「d90」、「d120」といった注記がみられるが、後述するように、「d90」と「100-120」と注記された資料が接合するため「d90」は90cmと理解してよさそうである。次に、このレベルが何を基準に測られているかが問題になる。可能性としては酒詰・岡田（1958）の地層断面図（第3・4・5・6図）上方に引かれた±0などとされている線から測った場合と地表面から測った場合が考えられる。しかし例えばCトレンチ出土のものに「0-20」という注記があることから、前者の場合空中から出土したことになるため、後者である可能性が高い。

このようなことから、Aトレンチ北半地区では80cm以上からが4層となりⁱⁱ、縄文時代早期の遺物の包含層にあたる。これは、土器の検討の結果、80cm以上のレベルからは後期の土器がほとんど出土していないことからわかる。つまり、80cm以上のレベルが注記されている資料に関しては多くが縄文時代早期の土器に伴う石器であると考えてよいⁱⁱⁱ。

4、剥片石器について

Aトレンチ北半地区4層出土の剥片石器は総数117点である。石材はほとんどがサヌカイトであり、他は砂岩の剥片が1点のみである。また分布をみると、2'区からは剥片2点のみ、3'区からもチップ1点、剥片1点のみの出土である。このようなことから剥片石器の分布は1区を中心とする礫群の分布とほぼ一致すると考えられる。器種組成は石錐1点、石鏃の失敗品である可能性が高いもの3点、楔形石器14点、チップ^{iv}9点、剥片69点、R.F.4点、M.F.15点、石核2点である。ただし、報告書に掲載されている石鏃などの多くが見つからなかったことから実際の状態を反映していないと考えられる。

では器種ごとに概要を述べていきたい。

石錐（1）は剥片を素材とし打面側を錐部として用いる。背面に礫面が付着する。左側面に折れ面がみられ、その折れ面を打面に背面側に比較的大型の二次加工を施す。右側面にも折れ面が見られるが、下方を両面調整で除去し錐部を作出しており、腹面側の二次加工は非常に丹念である。錐部の尖端は明瞭に摩滅している。

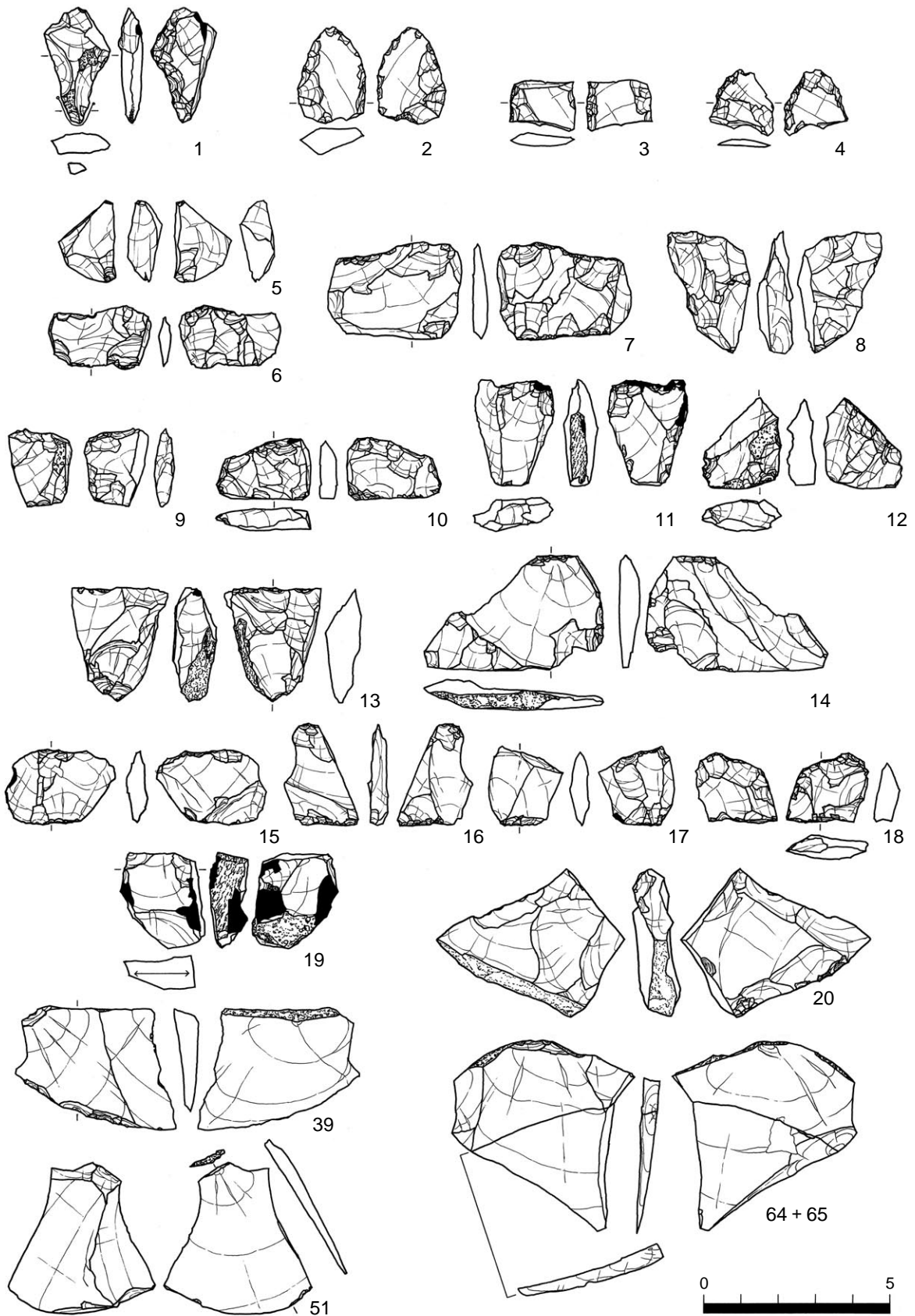


図1 石器実測図（番号は属性表に対応）

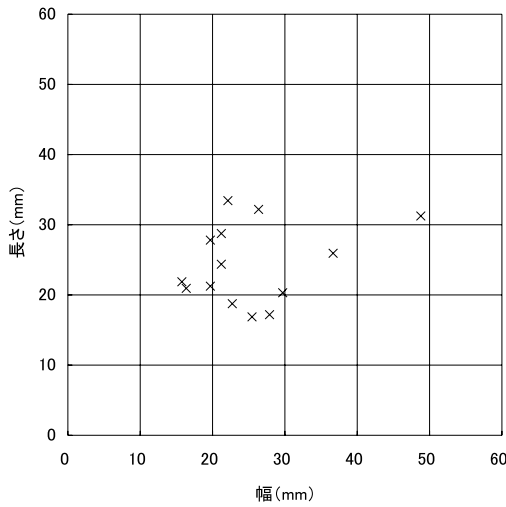


図2 楔形石器の長幅値

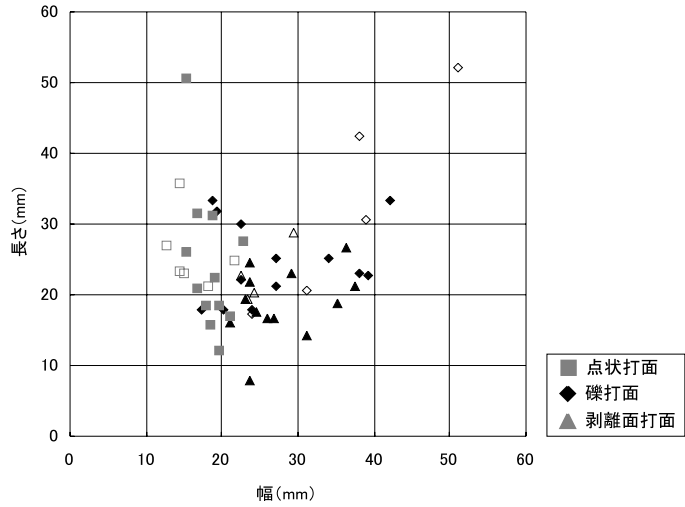


図3 剥片の長幅値

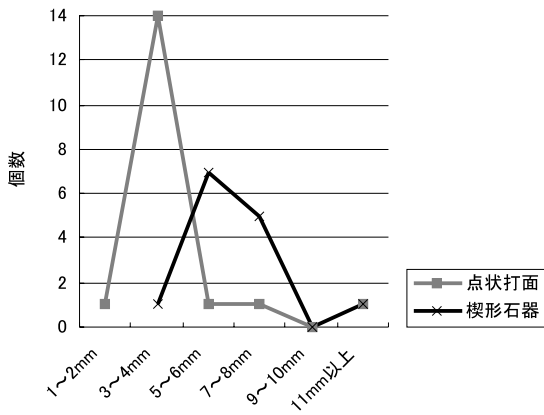


図4 点状打面の剥片と楔形石器の厚さ

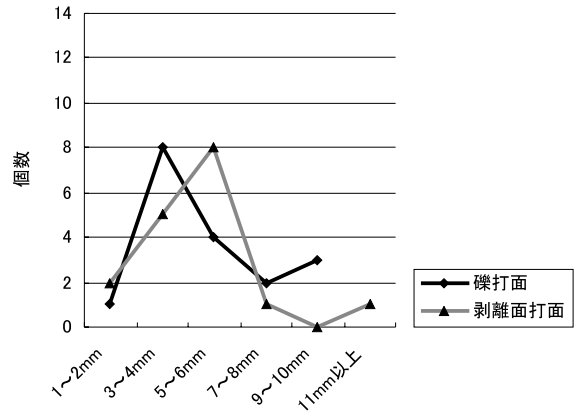


図5 礫打面と剥離面打面の剥片の厚さ

属性表1

no	出土地区	レベル	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	1-	100-120	石錐	31.5	18.1	5.8	3.0	
2	1	80-100	石鏃失敗	25.9	18.6	7.0	3.0	
3	1-	90	石鏃失敗	13.8	17.8	3.6	1.2	
4	1-	100	石鏃失敗	17.1	17.1	2.0	0.6	
5	1	100-120	楔形石器	21.8	15.8	8.2	2.9	
6	1'	80-100	楔形石器	17.1	27.8	3.9	1.9	
7	1+	80-100	楔形石器	26.0	36.6	6.1	7.1	
8	1	100-120	楔形石器	33.3	22.1	8.4	5.2	風化弱
9	1-	80-100	楔形石器	20.8	16.5	4.7	2.1	
10	1	100-120	楔形石器	16.8	25.4	6.2	3.5	
11	1+	80-100	楔形石器	28.6	21.2	7.0	5.0	
12	1-	80-100	楔形石器	24.4	21.1	7.8	3.7	
13	1	100-120	楔形石器	32.1	26.4	10.5	9.0	風化弱
14	1	100-120	楔形石器	31.2	48.7	7.1	10.4	
15	1	100-120	楔形石器	20.2	29.8	5.6	2.8	
16	1+	120	楔形石器	27.7	19.6	5.1	2.0	
17	1	100-120	楔形石器	21.4	19.6	5.7	2.2	
18	1'	80-100	楔形石器	18.8	22.7	5.8	2.7	
19	1+	80-100	石核	25.3	22.8	8.8	6.0	
20	1'	80-100	石核	40.0	50.9	9.8	15.4	風化弱

大川遺跡第1次調査出土の縄文時代早期の剥片石器

属性表2

no	出土地区	レベル	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	打面形態	背面の礫面	背面のボジ面	長幅値の生き	備考
21	1	100-120	チップ	15.7	18.6	2.7	1.0	点状	無	無		
22	1+	100-120	M.F.	14.3	31.2	4.7	2.5	剥離面	無	無		
23	1+	100-120	剥片	24.6	23.6	11.5	6.8	剥離面	無	無		風化弱
24	1+	100-120	M.F.	19.4	23.4	4.2	1.2	剥離面	無	無	×	風化弱
25	1-	80-100	剥片	22.6	39.2	5.9	5.0	礫	無	無		
26	1-	80-100	剥片	31.7	19.4	3.1	2.2	礫	無	無		
27	1-	80-100	剥片	26.7	36.4	4.9	4.8	剥離面	有	無		
28	1-	80-100	剥片	27.6	22.9	7.2	4.8	点状	有	無		
29	1-	80-100	剥片	21.3	37.4	7.0	3.8	剥離面	無	無		
30	1-	80-100	剥片	26.1	15.2	3.8	1.8	点状	無	無		
31	1-	80-100	R.F.	20.3	24.2	5.1	3.0	剥離面	無	無	×	
32	1-	80-100	剥片	8.0	23.6	3.3	0.4	剥離面	無	無		
33	1-	80-100	剥片	31.6	16.6	3.4	1.2	点状	無	無		
34	1-	80-100	チップ	12.2	19.5	2.5	0.7	点状	有	無		
35	1-	80-100	R.F.	30.7	38.8	5.4	7.0	礫	無	無	×	
36	1+	120	剥片	21.8	23.6	3.0	1.4	剥離面	無	無		
37	1+	80-100	剥片	17.7	24.6	2.1	1.1	剥離面	無	無		
38	1+	80-100	剥片	50.7	15.3	14.1	12.8	点状	無	無		バイボラーフレイク
39	1+	80-100	M.F.	33.4	42.0	8.5	9.5	礫	無	無		
40	1+	80-100	剥片	18.5	19.5	2.5	1.1	点状	無	無		
41	1	100-120	剥片	16.6	26.0	3.2	1.1	剥離面	無	無		
42	1	100-120	M.F.	21.2	27.1	9.0	5.1	礫	無	無		
43	1	100-120	剥片	22.5	19.0	3.0	1.2	点状	無	無		
44	1-	100-120	剥片	33.3	18.7	8.8	4.3	礫	有	無		
45	1-	100-120	剥片	18.0	20.3	2.2	0.9	礫	無	無		
46	1-	100-120	剥片	24.9	21.6	4.2	1.9	点状	無	無	×	
47	1-	100-120	チップ	18.6	17.9	4.2	1.5	点状	無	無		バイボラーフレイク
48	1-	100-120	剥片	18.0	23.9	4.4	1.8	礫	有	無		
49	1-	100-120	剥片	22.1	22.5	3.8	1.3	礫	無	有		
50	1-	100-120	剥片	16.6	26.9	2.1	0.7	剥離面	無	無		
51	1	80-100	M.F.	42.3	38.2	4.2	5.8	礫	無	無	×	
52	1	80-100	M.F.	22.9	29.1	4.7	4.3	剥離面	無	無		
53	1-	80-100	剥片	25.2	27.1	3.8	1.6	礫	無	無		風化弱
54	1-	80-100	剥片	25.2	34.1	5.3	4.2	礫	無	無		
55	1-	80-100	M.F.	18.7	35.2	5.4	3.2	剥離面	有	無		打面に調整
56	1-	80-100	剥片	20.6	31.1	3.3	1.1	礫	無	有	×	
57	1-	80-100	剥片	19.5	23.1	4.5	1.5	剥離面	無	無		
58	1-	80-100	剥片	27.1	12.8	3.2	0.9	点状	無	無	×	
59	1-	80-100	剥片	16.1	21.0	4.1	1.6	剥離面	無	無		
60	1-	80-100	剥片	35.9	14.3	5.6	3.2	点状	有	無	×	バイボラーフレイク
61	1	100-120	剥片	17.3	24.0	6.7	3.3	礫	無	無	×	
62	1-	80-100	剥片	23.2	14.3	3.9	1.2	点状	無	無	×	
63	1-	100-120	剥片	31.2	18.7	2.9	1.7	点状	有	無		
64 + 65	1-	90	剥片	52.0	51.2	7.2	11.4	礫	無	無	×	接合
66	1'	80-100	剥片	28.9	29.5	6.2	2.2	剥離面	無	有	×	風化弱
67	1'	120-140	剥片	23.1	38.0	4.8	4.2	礫	有	無		
68	1'	100-120	剥片	30.1	22.5	4.2	2.3	礫	無	無		
69	1'	100-120	M.F.	22.8	22.5	5.5	3.8	剥離面	無	有	×	
70	1'	80-100	チップ	17.8	17.2	3.0	0.9	礫	無	無		風化弱
71	1'	80-100	剥片	23.1	15.0	3.9	1.7	点状	無	無	×	
72	1	80-100	剥片	21.0	16.7	2.2	0.7	点状	無	有		
73	2'	100-120	剥片	21.2	18.1	4.4	1.5	点状	有	無	×	バイボラーフレイク
74	1'	100-120	剥片	17.1	21.2	4.3	1.5	点状	無	無		

2、3、4は石鏃の失敗品である可能性が高い資料である。2は背腹両面にポジティブな面を持つ剥片を素材としており、下面に礫面が付着する。正面左側辺下方、裏面右側辺下方に二次加工が集中している。これは断面をみるとわかるように、素材の最も厚い部分を除去しようとした二次加工であろう。この部分の除去に失敗し廃棄されたと考えられる。3^vは剥片を素材とし、両側辺に両面調整を施す。ただし、背面側右側辺は上方の一部のみに二次加工がみられる。上面と下面が折損している。4は剥片を素材とし、両側辺に両面調整を施す。背面側左側辺と腹面側左側辺は非常に微細な二次加工である。また背面側右側辺は下方の一部のみに二次加工がみられる。尖端部作出の意図が見られ、下面が折損している。

楔形石器(5~17)はサイズ^vにある程度斉一性がみられ長さ20~30mm前後、幅20~30mm前後、厚さ5~8mmに多くがまとまる(図2・4)。ただし、8・13は他に比べて風化が弱い。5は側面に剥離面を取り込む、アンデュレーションが顕著な剥片を素材としている。背面側上・下辺、腹面側上・下辺に階段状剥離がみられ、右側面の剪断面を形成し、これが最終剥離と考えられる。6は裏面上辺左方に階段状剥離がみられ、両側面に剪断面を形成し、いずれかが最終剥離と考えられる。また正面左方と裏面右方に上下両端にリングが収束する剥離痕がみられる。7^{vii}は比較的幅広の楔形石器で正面上辺、裏面上・下辺に階段状剥離がみられ、左側面の剪断面を形成し、これが最終剥離面と考えられる。8は正面、裏面の下辺に階段状剥離がみられ、右側面の剪断面を形成し、これが最終剥離と考えられる。9は剥片を素材とし背面に礫面が付着する。背面側下辺と腹面側上・下辺に階段状剥離がみられる。また両側面に剪断面がみられ、右側面の剪断面は正面下方の剥離痕に切られる。左側面の剪断面は上下両端にリングが収束し、これが最終剥離と考えられる。10は剥片を素材とする。背面側左側辺下方に階段状剥離がみられ、下面の剪断面を形成する。またこの剪断面を切る階段状剥離が背面側下辺右端、腹面側下辺左端にみられる。この階段状剥離に対向する上辺の背面側右方にも階段状剥離がみられ、右側面の剪断面を形成し、これが最終剥離と考えられる。11は正面右側辺上方、裏面左側辺上方に階段状剥離がみられる。また左側面、下面に剪断面がみられる。左側面の剪断面は上下両端にリングが収束し、下端は打点が明瞭である。これが最終剥離と考えられ、下面の剪断面を切る。右側面に礫面が付着する。12は正面に礫面が付着する。正面左側辺下方、裏面右側辺下方に階段状剥離がみられ、下面の剪断面を形成する。またこの剪断面を切る階段状剥離が正面下辺右方にみられ、対辺の裏面側上辺にも階段状剥離が顕著である。13は今回紹介する楔形石器のなかで最大厚を測る。正面下辺、裏面上・下辺に階段状剥離がみられ、右側面の剪断面を形成する。またこの剪断面は正面下方の剥離痕に切られる。右側面に礫面が付着する。14は比較的幅広の楔形石器で、剥片を素材とし下面に礫面が付着する。背面側上辺・右辺、腹面側上辺に階段状剥離がみられる。正面に上辺の階段状剥離に伴う大きな剥離痕みられる。15は正面上辺中央・下辺右方、裏面上辺、下辺左方に階段状剥離がみられる。また正面右方にリングが上下両端に収束する剥離痕がみられる。16は正面上・下辺、裏面上・下辺に階段状剥離がみられる。右側面に横方向の折れ面がみられ、上・下辺の階段状剥離がその折れ面を切る。17は剥片を素材とする。背面側下辺左端、腹面側上・下辺に階段状剥離がみられる。上面に横方向の折れ面がみられ、階段

状剥離の進行により左方は線状をなす。18は剥片を素材とする。背面側上辺・右辺・下辺左方、腹面側上辺・左辺・下辺に階段状剥離がみられる。また下面に横方向の折れ面がみられ、階段状剥離の進行により、右方は線状をなす。

石核は2点あるが、その内1点(20)は風化が弱い。19は非常に小型な石核で、重量は8.8gと軽量である。上面、右側面、裏面に礫面が付着する。基本的に上面と右側面の礫面を打面としている。正面下方の剥離痕は裏面の微細な剥離により切られており打点が残らない。20は下面、右側面下方に礫面が付着し、打面としている。また右側面上方には横方向の折れ面がみられ、正面にその折れ面を打面とする剥離痕がみられる。ただし、後に折れ面に調整を施しているため打点が残らない。

チップ、剥片、R.F.、M.F.(以下これらを一括して剥片とする)は打面を有するもののみ検討する(属性表^{2viii})。また1点のみ出土した砂岩製のものは除く。打面形態の比率は点状打面34%(18点)、礫打面34%(18点)、剥離面打面32%(17点)である。以下打面形態ごとに特徴を述べる(図3・4・5^{ix})。点状打面の剥片の長幅値^xは他に比べ、やや縦長の傾向を示すものが多い。厚さ^{xi}は3~4mmにほとんどが集中する。点状打面の剥片の多くが楔形石器から剥離されたものと考えられるが、厚さにおいて、多くが楔形石器よりも薄いことが指摘できる。礫打面の剥片は39、51、64+65のような、やや大型のものが少量ではあるが含まれる。こういった剥片は長幅値に対して、厚さが薄い印象を受ける。64+65は右側面に打点が明瞭に認められる折れ面がみられ、その折れ面と同時割れた器体中央の折れ面で接合する^{xii}。また、厚さは3~4mmに多くがまとまるが、点状打面ほどの集中はみせない。剥離面打面の剥片は基本的に小型であり、厚さは5~6mmに多くがまとまる。

5、まとめ

大川遺跡第1次調査出土の縄文時代早期(大川式~神宮寺式主体)の剥片石器についてまとめておきたい。

まず分布は礫群とほぼ一致する。石材に関してはサヌカイトにほぼ限定される。

また今回、比較的まとまって出土していたのは楔形石器であった。楔形石器は長さ、幅、厚さにある程度斉一性があり、前述したように、長幅値では長さ20~30mm前後、幅20~30mm前後と小型のものが多い。厚さは、5~8mmに多くがまとまる。ここで厚さに関して若干の考察を加えよう。

楔形石器を観察すると素材面を残すものが比較的多く、素材のポジティブな面や正面に礫面がみられるものが14点中7点である。これらは、素材の厚さを多少なりとも反映していると考えられることから、素材選択の時点で厚さがある程度おなじものを選んでいったといえよう。しかし、素材面を全く残していない楔形石器に関しては、素材の厚さを想定することは困難である。ただし、点状打面の剥片の厚さが、3~4mmという薄手のものにほとんどが集中する傾向がみられたことから、素材面を残さない楔形石器が素材面を残すものに比べ、かけ離れて厚手の素材から減じられていったとは考えにくい。以上のことから当石器群の楔形石器は厚さが素材選択の一要素になっていた可能性が高いといえよう。

謝辞 本稿を執筆する機会を与えてくださった辰巳和弘、若林邦彦両先生に感謝の意を表したい。また、発掘後約半世紀がたった今、本稿を執筆できたことは一重に本学の諸先輩方の整理作業、管理保存のおかげである。諸先輩方に畏敬の念を示したい。

註

- i 酒詰・岡田（1958）の第7図参照
- ii 酒詰・岡田（1958）の第3・4図参照
- iii 何点か他に比べ風化が弱いものがあり、属性表に「風化弱」としている。しかし、石器が非常に汚れており、できる限り洗いを行ったが注記が消える危険性があったため、正確に観察を行えない場合があった。
- iv 剥離軸など関係なしに、最も長い部分において2cm以上のものを剥片、2cm未満のものをチップとしている。
- v この資料は酒詰・岡田（1958）に図示されている、第8図22の石器にあたると考えられる。
- vi 長幅値は図面と同じ方向で四角形を想定して計測した。厚さは最も厚い部分をノギスで計測した。
- vii この資料は酒詰・岡田（1958）に図示されている、第8図18の石器にあたると考えられる。
- viii 「長幅値の生き」は著しく破損した資料に「x」をつけている。
- ix 図3の白抜きは著しく破損した資料を示す。図4・5の厚さの値は小数点以下を四捨五入している。
- x 方眼紙の上に石器を置き剥離軸を基準に四角形を想定して計測した。
- xi ノギスで最大厚を計測した。
- xii 「d90」と「100 - 120」とレベルが注記された資料が接合している。そのため「d90」は90cmと理解してよい。

参考文献

- 酒詰仲男・岡田茂弘1958「大川遺跡」『奈良県文化財調査報告』第2集 奈良県教育委員会
田部剛士2003「大川遺跡のこれまでとこれから」『利根川』24・25 利根川同人
松田真一1989『奈良県山辺郡山添村 大川遺跡』 檀原考古学研究所編・山添村教育委員会
2003「大川遺跡の調査が提起した問題と課題」『利根川』24・25 利根川同人